

読書通信



No. 186

① 最初はちよつとキワモノっぽい気がしたのだが、どうしてまっとうな調査ものだった。長い年月と多数の取材先を求めて書かれた、極めて説得力の強い内容である。石井妙子『女帝小池百合子』（文藝春秋、1650円）を読めば、知事戦圧勝は当然と思えてくる。自らの履歴についても、政治家としての約束事についても、ウソをつけてけりりとしている生きざまは天性のものらしい。前者の典型は「カイロ大学卒」の経歴詐称であり、後者はアスベスト被害者の家族に対する驚くほど不誠実な対応である。

会见で政治家が嫌がる質疑まで追い込めない事情がよくわかる。答える側も会見の数を減らし、質問を制限し、嫌な記者は指名しない。それでもどうやって食い込んでいくか。これは根の深い問題であり、記者だけが努力しても限界があるとしか言いようがない。読者の側も取材の内幕を知ることから始める必要がある。

③ 8月15日は敗戦から75年目に当たる。この日を迎えるにふさわしい8つの物語はどれも味わい深い。半藤一利『靖国神社の緑の隊長』（幻冬舎、1430円）の表題作の主人公は、靖国神社の銀杏を拾って神社の一角に自ら作った畑で苗木を育てる。そして戦争の犠牲者たちの遺族に贈るのだ。平和は鳩より緑のほうがふさわしいといつて。老人は中国大陸を連隊長として

カイロ大が卒業を認めているじゃないかという友人がいたが、本書の論証からは大学の偽証の色が限りなく濃い。小沢、細川、小泉たち領袖にすり寄り政界の階段を駆け上がっていくさまも過不足なく描かれる。本書を、男社会の犠牲者の物語として読む人、孤独な女の物語を「大衆消費」的に読む流れを批判する人（例えば朝日新聞7月19日付け書評）などさまざまだが、面白い本だと思つて読むことを魔女狩りのように言うのはいかがか。問題は面白さの質である。

② 政治記者は何をやっているんだ、という声をよく聞く。確かに政治記事の大半が政局記事に墮している。南彰『政治部不信』（朝日新聞出版、869円）は内側から政治記者の抱える問題を追究しようとした力作である。とくに記者

転戦した吉松喜三大佐。戦闘が終わることにその地で部下たちと植樹をしていくのだが、敗戦で抑留される話もい。他の7編も戦争の熾烈さ、愚劣さの中に心温まるものばかり。平和のありがたみを知るに好個の物語集である。

④ 漱石は1916（大正5）年に死んだはずだが、小島英俊『昭和の漱石先生』（文芸社文庫、792円）によると実は生きながらえて終戦の年によくやく大往生した。それも政治家や軍人、財界人と連携を保って戦争を防ぐため大活躍をしたというのだが、その一部始終は現実性に富んでいる。町田忠治、斎藤隆夫、池田成彬、宇垣一成、石原莞爾、北一輝など漱石が手を組む面々もよく書いて面白。なるほど「歴史改変小説」の異色作である。（浅野 純次）